

東洋音楽学会 沖縄支部通信 NO.36 (August 31, 2017)

Newsletter of the Okinawa Chapter, Society for Research in Asiatic Music

発行：東洋音楽学会沖縄支部

事務局：〒903-8602沖縄県那覇市首里当蔵町1-4

沖縄県立芸術大学音楽学部 小西潤子

東洋音楽学会のホームページ：<http://tog.a.la9.jp/>

【第 69 回定例研究会】のご案内

日時：2018年2月18日(日) 14:00-16:00
場所：沖縄県立芸術大学 首里当蔵キャンパス 奏
楽堂講義室 (奏楽堂ホール2階)
参加費：会員・非会員ともに無料 (予約不要)

内容：研究発表1 又吉恭平
「沖縄県における獅子舞の歴史と伝承ー浦添
市の獅子舞を中心にー」

研究発表2 小川恵祐
「『アジア伝統芸能交流』プロジェクトをめ
ぐる舞台化の議論と民族音楽学者」

【第 68 回定例研究会記録】

時：2017年7月1日(土) 午後3時～
所：琉球大学学生会館

第一部：シンポジウム

「台湾原住民ブヌンにみる言語と芸能の復興」

登壇者：

- ・石垣直 (沖縄国際大学) 「現代台湾における原住
民族語復興への取り組みーその政策史と現状」
- ・翁長巳酉 (打楽器奏者) 「どうしてサンバ? 打楽
器と唄でつなぐ、原住民の文化継承と共同体作り」
- ・陳俊延 (高雄市桃源區建山國民小學校長) 「建山

國民小におけるブヌン文化教育の取り組みの報
告」

司会：岡田恵美 (琉球大学) 通訳：鄭昱玟 (琉球
大学留学生)

第二部：ブヌンの児童によるミニ・コンサート

■発表報告

本研究会では、台湾原住民ブヌンの子ども達が通
う高雄市桃源区の山岳集落にある建山小学校から
教員・児童総勢 28 名を琉球大学に招聘し、台湾原
住民ブヌンにおける言語や文化の伝承をテーマと
したシンポジウムならびにミニ・コンサートを実施
した。

第一部のシンポジウムでは、社会人類学者の石垣
直、打楽器奏者の翁長巳酉、建山小学校長の陳俊延、
以上3名のパネリストの発表を基盤に討議を行っ
た。石垣は、台湾における原住民族語の復興政策の
歴史に言及した上で、現在の若年層における使用状
況や伝承の課題について指摘した。台湾の民主化や
近年の台湾原住民の権利回復運動の高揚の中で、
2017年5月には「原住民族語言發展法」が制定さ
れ、原住民族語が「国家言語」として認定される法
律が可決された。こうした言語復興政策が今後の伝
承にどのような影響を及ぼし、教育へと波及してい
くのかは注目に値する。続く翁長の発表では、自身
が台湾原住民のブヌン、パイワン、プユマ、ルカイ、
セデックの子ども達が通う各地の小学校で行った
伝統歌唱の録音について、映像を交えた報告が行わ
れた。それらの小学校では、課外活動としてサンバ

が盛んであり、翁長は打楽器奏者としてサンバの指導を行うと同時に、各原住民族で伝承されてきた歌を打楽器と融合させることによって、新たな形での文化継承や世代を超えた地域共同体の再構築の可能性について指摘した。最後のパネリストである陳は、建山小学校で実際に行われているブヌン語教育ならびに伝統文化教育について多くの写真とともに具体的な事例を紹介した。それらの授業は地域の年配者の協力の下に成立し、学校現場と地域コミュニティとの密接な連携が不可欠である。また文化教材のデジタル化等、日本の教育現場と比較しても、ICTを活用した文化教育が先進的に行われていることが示された。

第二部の児童によるミニ・コンサートの前半部では、ブヌンの伝統的な儀式に伴う歌、「神への祈りの歌」「狩猟のための祈りの歌」「粟の酒を醸造する女性達の歌」「狩猟からの帰還の歌」「8部合唱」「狩猟の報告の歌」、以上の6曲が舞踊と共に披露された後、わらべうたや教訓歌が歌われた。コンサートの後半部では、児童が小学2年生から始めたという、サンバ(サンバヘギ)の力強く息のあった演奏で参加者を魅了し、フィナーレでは琉球大学学生有志との演奏によるコラボレーションも行われた。

本研究会を通して、台湾原住民が抱える言語や伝統文化の伝承の問題は、沖縄における「しまくとぅば」の伝承の危機的状況や郷土文化を次世代へいかに継承して行くべきか、そこに教育がどのように関与できるかという課題とも共通することが認識され、今後も互いの事例を情報共有していく必要性を強く感じる内容であった。(報告：岡田恵美)

【第 67 回定例研究会記録】

時：2017年6月17日(土)午後3時～

所：琉球大学50周年記念館

レクチャー&演奏「韓国の打楽器芸能『農楽』～叩いて、踏んで、結んで、ほどく～」

講師：神野知恵、崔在哲(チェ・ジェチョル)、朴恵珍(パク・ヘジン)

■発表報告

韓国の打楽器芸能「農楽(ノンアク)」とは、5種類の打楽器を中心に様々なリズム・パターンを展開させながら演奏する、朝鮮半島南部で伝承されている民俗芸能である。韓国の打楽器芸能と言えば、「サムルノリ」が世界的に知られているが、これは農楽で使用される楽器やリズム要素を舞台化した芸能であり、床に座って行われる。これに対し、元々の農楽は、楽器を演奏しながら地域の家々を巡り、儀礼や村祭の最後には、複数で構成された隊列(直線状、円状、渦巻き状等)を様々な変化させながら、村に福が訪れ、悪霊を鎮めるように祈願する農村芸能である。

研究会の前半では、神野知恵によるレクチャー「韓国農楽の中に込められた『ほどき：プリ』の哲学」が行われた。まず農楽で使用される楽器(打楽器：ケンガリ、チン、チャング、プク、ソゴ、ダブルリード楽器：テピョンソ)の特徴や役割について説明がなされ、農楽が行われる場として、「堂山クツ」(旧暦1月15日の村の守護神への儀礼)や「チュルクツ」(綱作りや農村の男女対抗の綱ひき)等を例に、その内容にも地域差があることが紹介された。農楽の最後には、村々の人々が共に飲み歌い踊る「ティップリ(後ほどき)」が必ず催され、日常で様々な問題を抱える、人々の心もほどく役割を持つ。神野のレクチャーでは、「メジウム(締め)」に対する、この「プリ(ほどく)」が、農楽のリズム構造の中にどのように現れているのかが、実演とともに示された。農楽には下記のような3小拍×4拍型のリズムが多く、その4区分は1年の周期を表す春夏秋冬や、「起・承・結・解(ほどく)」という概念を含む。

小拍：| 1 2 3 | 4 5 6 | 7 8 9^{*} | 10 11 12 |

春(起) 夏(承) 秋(結) 冬(解)

ここでは、9小拍目に「メジウム(締め)」があり、その後が「プリ(ほどき)」と考えられ、両者の対比がリズム構造の根幹を担っているという。

研究会後半では、チャング奏者の崔在哲(チェ・ジェチョル)、韓国在住の高敞(コチャン)農楽伝統保存会の朴恵珍(パク・ヘジン)、神野知恵の3名による

農楽のデモンストレーションが行われた。最初に、福を招く儀礼の実演が行われ、その後はソゴを用いた朴の舞踊の他、チャング、ケンガリ、チンによる緩急・強弱・メジウムとプリの変化が激しい技巧的でダイナミックな演奏が披露された。

その後の質疑応答では、様々な質問が各講師へ投げかけられた。まず、3mほどの白色のリボンが付いた帽子「サンモ」の役割に関する質問では、身体変化によってリボンを円形や直立に動かせる様子が実演で示された。その他にも、韓国の大学ではなぜ農楽のサークル活動が非常に盛んなのかという質問に対し、1980年代に興隆した学生運動に打楽器を用いた農楽が導入された経緯があること、現在でも各大学には複数の農楽サークルが存在し、合宿などを通して農村で農楽を習い、それが現代の若者にも伝承されている状況について朴の実体験を伴う説明があった。また、沖縄のエイサーとの共通点についても今後調査してはどうかという指摘も挙がった。（報告：岡田恵美）

【第66回定例研究会記録】

時：2017年2月11日（土）午後3時～
所：沖縄県立芸術大学音楽棟1階大合奏室

講演「沖縄宮古八重山民謡大全集 CD ボックス『唄方』と島うた」

講師：宮沢和史（沖縄県立芸術大学非常勤講師）

鼎談「三線の竿の素材『くるち』の確保、育成～三線製作の実情」

パネリスト：宮沢和史・平田大一（[公財]沖縄県文化振興会）・仲嶺幹（沖縄県三線製作事業協同組合）

■発表報告

第66回定例研究会は、2017年2月11日、沖縄県立芸術大学の音楽棟1階大合奏室で開催された。会場には多くの観客が集まった。最初に、宮沢和史

さんが自身の沖縄民謡への想いを述べたあと、沖縄民謡の保存・継承を目的に始めた「唄方プロジェクト」について語った。そして、彼が2012年より沖縄本島、宮古、八重山をめぐり収録してきた245曲は、17組のCDボックス「沖縄 宮古 八重山民謡大全集（1）唄方～うたかた～」となり、沖縄県内の図書館、小学校、中学校、高校、大学、国内外の県人会に寄贈されたことを報告した。

CDの収録にたずさわった、大城クラウディアさん、大城貴幸さん、Hiraraさんの三人の歌手も登場し、CDボックスに収録されているうたを数曲披露した。宮沢和史さんは、三人の出演者との対談を通して、沖縄民謡の多様性や魅力、言葉の継承の危機がもたらす影響などについて観客に伝えた。プエノスアイレス生まれの沖縄県系2世、大城クラウディアさんは、1世がつくった民謡「女の夢（みなくぬいみ）」を演奏した。大城貴明さんは、ウチナーグチ（沖縄の言葉）で挨拶した後、「花笠節」、「なーくにーはんたばる」を、そして、沖縄本島で活躍する宮古島出身の歌手 HIRARAさんは、収録されている宮古の民謡の中から「うふにぬしゅう」、「ゆなんだき かにすぎがま」の2曲を紹介した。大城クラウディアさんと大城貴明さんの二人が掛け合いで歌うと、会場は手拍子で湧いた。

後半は、「三線の竿の素材『くるち』の確保、育成～三線製作の実情」をテーマに、宮沢和史さん、平田大一さん、仲嶺幹さんの三人が鼎談を行った。宮沢さんは、鼎談の冒頭で、三線の竿に使われるくるちの木を植えるプロジェクトを行うようになった経緯について述べた。三線職人の仲嶺幹さんは、くるちが三線の素材として使えるようになるまでには、100年以上かかること、沖縄の三線職人が受け継いできた技を、そこで使われてきた沖縄の言葉とともに継承していくことが重要であることを述べた。最後に、現代版組踊「鬼鷲～琉球王尚巴志伝～」（平田大一演出）に出演する中高生が、歌と踊りを披露し、会場を盛り上げた。

沖縄民謡が、たくさんの人々の想いとともにも多様なベクトルを持ちながら展開していることを知ることができた貴重な講演であった。また、沖縄の言葉が失われていくことで、沖縄民謡の世界が大きく変わってしまうのではないかという危機感を、多く

の出演者の方が口にしていたことが印象的であった。皆が抱えているその危機感が、現在の沖縄民謡を盛り上げていく大きな力にもなっていることを感じた（記録：古謝麻耶子）。

【第 65 回定例研究会記録】

時：2016年3月30日（水）

所：沖縄県立博物館・美術館講堂

シンポジウム「人びとの記憶と記録に残るラジオ放送」

第一部：研究報告「戦前のラジオに乗った音、ラジオ環境はどうだったの？」

報告（1）三島わかな

報告（2）長嶺亮子

第二部：対談「戦前戦後の台北・沖縄のラジオ放送」

出演：川平朝清（元琉球放送アナウンサー、元沖縄放送協会会長）・中山榮子（元琉球放送アナウンサー兼プロデューサー）・大野克郎（NHK 沖縄放送局アナウンサー）

■発表報告

第 65 回定例研究会は「人びとの記憶と記録に残るラジオ放送」というテーマのもと、2016年3月30日（水）15:00～17:30、沖縄県立博物館・美術館講堂にて開催された。本例会は「戦前の沖縄本島・八重山諸島・台湾のラジオ音楽番組における洋楽受容と郷土意識の形成」（JSPS 日本学術振興会 科研費 24652038 助成事業、研究代表者：三島わかな・会員）との共催であり、科研の成果報告の一環となる。「放送文化」をテーマとしていることから、NHK 沖縄放送局ならびに琉球放送の後援を得て、ひろく一般市民に周知した。その結果、当日の参加者は非会員が大半を占め、来場者数は 100 名以上にのぼった。その点で、研究成果を一部の専門家のみならず社会で広く共有していただくという主催者側の目的や意図を、ある程度果たすことができたと言えよう。

プログラムは二部構成をとり、第一部では研究報告、第二部では対談がおこなわれた。第一部の研究報告「戦前のラジオに乗った音、ラジオ環境はどうだったの」では、まず研究代表者の三島わかな（会員）が戦前の沖縄県でのラジオ聴取のありようについて、1.聴取環境、2.聴取者のエピソード、3.聴取された楽曲について報告した。つづいて研究分担者の長嶺亮子（会員）が、戦前の台湾でのラジオ放送と内容傾向について概説した。来場者のアンケート回答では「戦前の沖縄でラジオがこのように聴取されていたことを初めて知った」という感想が多く寄せられた。

第二部の対談「戦前戦後の台北・沖縄のラジオ放送」では、NHK 沖縄放送局の大野克郎アナウンサーを聴き手として、研究代表者の三島がこれまで取材してきたインフォーマントのお二方にご登壇いただいた。歴史の生き証人の語りを来場者と共有したかったからである。登壇者の川平朝清氏は戦前の台北放送局制作の番組「子どもの時間」に子役として出演し、そして終戦直後沖縄に引揚げ、米軍政府運営の放送局 AKAR 初のアナウンサーとなった。もうひとりの登壇者である中山榮子氏は川平氏と同様に AKAR に勤務し、女性アナウンサー第一号さらにはプロデューサーとして戦後沖縄での放送の復興を担った。

「物資のかぎられた戦後沖縄で、どのようにして放送を復活させたのか」という聴き手からの問いかけに対して、「戦時中に沖縄本島海域で座礁した難破船の部品を再利用して、放送局に必要な機材を製作した。それを可能にしたのも、戦前に沖縄放送局に勤務した技術者が戦後も生き延びて AKAR のスタッフとなっていたから…」という登壇者の語りは、とりわけ印象深かった。この言葉は、戦前に身につけた技術力があつたからこそ、米軍占領下の沖縄社会が復興への道を着実に歩むことができたということの左証となる。敗戦後の「分断」ゆえに沖縄文化の諸相における「断絶性」にばかり意識が向きがちであるが、しかし「人」がいるかぎり、その技術力は必要とされ、異なる政治支配のもとで「連続」したのである（報告：三島わかな）。